

このディスクについて

平林 直哉

フルトヴェングラーの指揮した「未完成」は1950年1月、HMV/EMI（ウィーン・フィル）にセッション収録したものが唯一の正規録音であり、これが長くカタログにあった。フルトヴェングラーが生前に記録したもうひとつの「未完成」は映画「フルトヴェングラーと巨匠たち（原題は『音楽の使者』/1952年1月初公開）」の中に含まれるベルリン・フィルとのリハーサル（冒頭部分のみ）である。このリハーサルではマイクロフォンが映し出されるので、この時の全曲録音が存在するのではないかと噂された。しかし、このリハーサルの収録日は諸説あっていまだはっきりしていないし、この映画と関連する全曲録音も確認されていない。

時は流れ、ようやくフルトヴェングラー指揮ベルリン・フィルの「未完成」全曲盤が登場した。それは意外なことに、日本コロムビアのDXM157（1972年11月新譜）のLPが世界最初である。これはア

メリカ・ヴォックス原盤によるものであり、組み合わせはベートーヴェンの交響曲第5番（ベルリン・フィル/のちにユニコーン原盤と同一と判明）だった。しかし、2曲とも日本コロムビアのLPに録音データは一切記されていないかった。一方、本家のヴォックスからは翌1973年10月（TV4478）に発売されているが、こちらのジャケットには「未完成」が〈1948〉、ベートーヴェンの第5が〈1943〉と録音年のみ記されていた。

ここでちょっと不思議なことに気がついた。1973年に出版されたオルセンのディスコグラフィ（第2版）を見ると、日本コロムビアのDXM157の「未完成」が掲載されているのだが、〈1948年10月24日〉と正しい日付けがあてがわれていることだ。オルセンの第2版にはこのDXM157のみが掲載されていることから、米ヴォックス盤LPが発売される前にこの第2版が刊行されたようだ。となると、オルセンは録音データのないDXM157の収録日をどうやって特定出来たのか？まず考えられるのは、オルセンが原盤供給元のヴォック

スに問い合わせたと思われること。でも、これでもつじつまが合わない。なぜなら、「未完成」と組み合わせられたDXM157のベートーヴェン第5番はオルセンの第2版では〈収録日、収録場所不明音源リスト〉の中に入れているからだ。

ちなみに、「未完成」は日本コロムビアではその後OP7520（1975年10月25日発売）、OC7133（1977年11月25日発売）と2度LPで再発売されているが、ジャケットには一度もデータは掲載されていない。ただし、1979年の「レコード・イヤーブック」（「レコード芸術」別冊付録、音楽之友社）には、オルセンを参照して日付けが記されている（この「未完成」は日本コロムビアではCD化されなかった）。なお、この「未完成」で国内盤として最初にデータを記載したCDはクラウン／パレットPAL1073（1988年7月1日発売）と思われる。

ベートーヴェンの「英雄」は1947年（SP）と1952年（LP）（いずれもウィーン・フィル）の2種のHMV／EMIの正規録音があり、

これらが長くカタログにあった。当然、ファンの期待はベルリン・フィルとの「英雄」に向けられたが、一部ではアメリカAllegro（3113）、イギリスAllegro（ALL701）から発売された偽名LP、フリッツ・シュライバー指揮ドレスデン国立管弦楽団が戦時中のフルトヴェングラー指揮ベルリン・フィルではないかと噂された。しかしながら、解釈はフルトヴェングラーとは似ても似つかないものであり、非フルトヴェングラーは決定的であった。

初めて本物のベルリン・フィルの「英雄」を聴けるようになったのは1974年9月頃、カナダのRococoが1952年12月7日の定期公演をLP化（2050）した時である。このライブは翌1975年に日本コロムビア（OP7508／5月25日発売）からも発売され、広く認知された。

1979年、イタリア・チェトラCetraからフルトヴェングラー指揮のベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」（ベルリン・フィル）、第8番（ウィーン・フィル、1954年）、第9番（フィルハーモニア、

1954年)の3枚組(LO530)が発売された。この中で第8番は世界初出だったが、「英雄」は〈1952年12月7日〉と記されていたので、誰もがロココ/日本コロムビアと同一音源だと信じていた。ところが、間もなく「今まで出ていたものとは明らかに別演奏」という情報が伝えられた。その後、このチェトラ盤は〈1952年12月8日〉と日付けが特定されることになるのだが、ジョン・ハントのディスコグラフィ(第3版、1990年)のように、このチェトラ盤を〈1950年6月20日〉と明記した資料もあって、一時期わずかではあるが情報が錯綜していたこともあった。かくして、1日違いの「英雄」は1980年、キングレコードから国内盤(K20C13、9月5日発売)としてLP化され、この時初めて正しい日付けが記された。現在では3種のベルリン・フィルの「英雄」は放送局所蔵のオリジナル・マスターによるLP、CDも発売されており、録音データの混乱には終止符が打たれている。

ところで、この「英雄」はLP時代、制作者には悩ましい曲だった。

つまり、第1、第2楽章が長く、後半の第3、第4楽章が短いため、LPの第1面に第1、第2楽章をカッティングすると、後半の第3、4楽章との音質の差が露呈してしまうし、音質の均衡を考えると、どうしても第2楽章の途中で面をまたぐことになる。フルトヴェングラーの最初の「英雄」となったウラニア盤LP(URLP7095)は第1、2楽章全部が最初の面にカッティングされていたが、その後に発売された正規盤の「英雄」(H MV ALP1060)は第2楽章の途中で面を裏返す切り方だった。H MV盤が発売された当初、イギリス、日本の双方の雑誌に「第2楽章の途中で裏返すのは興をそがれる」と指摘されていた。前述のチェトラ盤も同じく途中で切る方法が採用されているが、特にフルトヴェングラーのような遅いテンポの演奏は、この方法が多く採用された。しかし、CDが当たり前になった昨今、このような話は、もはや全くの昔話かもしれない。